

| | |
|---------------|----------------|
| 発表タイトル | 日本史における東海道の「旅」 |
| 発表者所属名 | 国際日本研究専攻 教授 |
| 発表者氏名 | 倉本 一宏 |



現在、旅行は行楽として根付いているが、「旅＝行楽」という概念は、近世に成立したものである。街道が整備され、寺社参詣に人々が大移動し、旅が文化として根付いた江戸時代こそ、現代にまでつながる「旅」概念が生まれた時代であった。

東海道を旅した平安時代・鎌倉時代・江戸時代の紀行文学を題材に、日本人の「旅」に対する意識がどのように変わってきたのかを読み解くと共に、古代・中世の「移動」と感動の記録が、後の近世の「行楽」の素地となったことを示す。

<古代の「旅」>

東海道の利用は律令官人に限られていた。中央と地方との国司の赴任と帰任、公使の往来、中央からの政令の伝達、地方からの行政上の報告・連絡などである。一般人の利用は、調・庸・雑物など租税の中央への輸送などがあつたに過ぎなかった。

さらに苛烈な移動は、衛士・防人といった兵役に従事する者である。衛士は京を警固する者、防人は筑紫を警固する者であり、往復の食料や生活用具の他、武器まで自弁であつた。

<中世の「旅」>

京と鎌倉を結ぶ「海道」には、朝廷・幕府の使者、軍役勤務、訴訟・陳情などに伴う多くの人馬、また勸進上人などの宗教者、熊野詣をはじめとする社寺参詣人など、様々な人々が往来した。年貢輸送を行なう農民や行商などの商人の往来も盛んになった。

<近世の「旅」>

近世の東海道の「旅」で最も大がかりなものは大名による江戸への参勤交代であつたが、この制度が交通の発達に資したことも大きかった。その他、幕府や諸藩の武士が公用で出張することも多かったほか、遊学や物見遊山で旅行することもあつた。

それにも増して多かったのは、庶民の「旅」であつた。特に50～60年周期で数百万人にのぼる都市・農村の膨大な民衆が行なつた伊勢神宮への「御蔭参り」は、多くの庶民に「旅」を経験させるうえで、大きな機縁となつた。